



Title	ワークショップ 異言語環境において日本近代小説を読む 太宰治『黄金風景』を例に：中国語（繁体字）
Author(s)	莊, 千慧; 李, 雅婷
Citation	多言語翻訳：太宰治『黄金風景』. 2012, p. 50-54
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/32749">https://hdl.handle.net/11094/32749</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「異言語環境において日本近代小説を読む

### —太宰治『黄金風景』を例に—

繁体字中国語担当 大阪大学大学院 莊 千慧

台湾大学日本語学科 李雅婷

#### はじめに

太宰治の作品がはじめて台湾に出版されたのは「解嚴」<sup>1</sup>された直後である。このことから、政治的な事情により、太宰の作品を公に紹介するのは禁じられていたにもかかわらず、日本文学に関心を持つ人々は、制限された時期からすでに太宰の小説に注目していたと考えられる。

今回の翻訳作業においても、台湾と日本における生活文化の共通点が多くあるため、訳せない表現はほとんどないと言えよう。本発表では、今回の翻訳の際に見出した文化的な共通点をはじめ、台湾すでに出版された『黄金風景』の翻訳との比較を通して、この作品が異なる言語に変換された時に見られる文化的な特徴について説明する。

#### 一、共通する文化

台湾には、日本植民地時代からの生活習慣が未だに多く残されている。『黄金風景』を訳す時も、文化面での類似性があるため、想像しにくい表現が少ない。以下にいくつかの例をあげる。

黄金風景の原文に「毎朝々々のつめたい一合の牛乳」という文がある。これは朝の牛乳配達サービスがない国の人には想像しにくいことだと考えられる。しかし、台湾では毎朝の牛乳や羊乳の宅配サービスが古くから存在している。実際、台湾で宅配された時に使われる牛乳の瓶の大きさを見てみると、日本に使用されている宅配用の牛乳瓶と類似していることがわかる。以下は日本と台湾に使用された牛乳の瓶の写真を引用する。



図一



図二



図三

図一は『黄金風景』が発表された昭和十年代の時に日本で使われていた牛乳瓶である。そして、

<sup>1</sup> 台湾は政治的な事情から、民国三八（一九四九）年から民国七六（一九八七）年までの期間を「戒嚴時期」と称し、外国の書籍・音楽の輸入を厳しく制限していた。

図二が台湾現存の一番古い瓶入りの牛乳で、図三が台湾の現在の牛乳宅配に使用される瓶である。これらの写真から、時代とは関係なく、台湾と日本に使われている牛乳の瓶が類似しているとわかる。なお、瓶の規格も容量も日本と同じく、180ミリリットルが主流である。よって、「一合の牛乳」は台湾人にとってとても馴染みのあるものであり、今回の翻訳作業でも、そのまま「一本の牛乳」と訳せば、その瓶の大きさ及び飲んでいる時の風景が台湾の読者に伝わる。

次に、もう一つの類似点、家の構造の共通点について触れたい。作品には、「主人公が玄関の式台にしやがんだ」という一文があり、武家屋敷に由来した式台は日本独特なものであるため、主人公が如何なる状態でどこにしやがんでいたか、日本以外の国では想像しにくい可能性が高い。しかし、台湾では、日本殖民地時代に日本式の官邸が多く建てられ、統治が終わったあともそのまま残り、博物館や民家として使われている。たとえば、以下に引用する図1の民家と図2の記念館の写真では、玄関に式台が見られる。



図1



図2

玄関にある式台については普遍的に台湾の読者に認識されているため、今回の翻訳の時にスムーズに訳すことができた。

最後に、作品の中で巡査が戸籍調べに主人公の家に来たという場面について触れたい。戸籍調べという制度のない国が多くあるにもかかわらず、台湾では明治38年(1905年)から、戸籍調査の制度が始まっていた。当時の戸籍調査に関する書類について、次の画像を引用する。

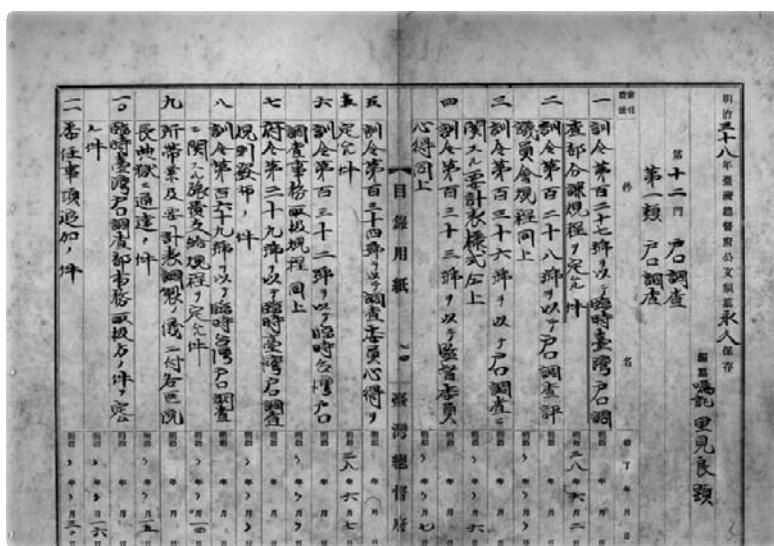


図3

この写真では、当時の「台湾の戸口調査規程」が記述されており、これは、『黄金風景』に書かれていた、巡査が民家に尋ね、戸籍調べをするという流れと類似する。実際、台湾で行われた「戸口

調査」の風景に関して、次の写真を引用する。



図

この写真では大正元年の時の巡査が台湾の先住民である阿美族の戸籍を調査している。台湾大学のデーターベースに所存されている、この写真の横にある説明では、「巡査が家ごとに戸籍調査をしており、全員が家の外に出て質問を受けている」と書かれている。こちらの写真で記録された場面も作品の中で描かれた戸籍調査の場面を想起させる。以上に引用した資料からわかるように、明治・大正期では「戸籍調査」が台湾に実施されていた。そしてその制度は現在でも台湾で行われている。そのため、報告者が翻訳する際、そのまま日本語の「戸籍調査」を意味する「戸口普查」という語に訳し、注釈を付け加える必要がなかった。以上のように、日本の町を背景にした『黄金風景』だが、台湾の生活環境と類似する点が多いため、訳す時に難訳の箇所が少なく、そして台湾と日本の絆を、今回の翻訳プログラムを通して再認識した。

台湾と日本における文化的な共通点について、以上のように説明した。次は台湾で出版された『黄金風景』の訳について述べる。台湾における『黄金風景』の訳は一点のみである。今回のプログラムで翻訳された文章と鄭氏による先行の翻訳と対照した結果、二つの翻訳には一つ大きな違いが見られる。次はそれらの相違点を引用し、このような違いが生じた理由について説明する。

## 二、「出版された『黄金風景』と今回の翻訳との相違点」

(日1) 傍線部 おい、とその度毎にきびしく声を掛けでやらないと  
という一文の訳は以下の通りである。

(繁1) 傍線部 每當這樣的時候如果不嚴厲地喊聲喂

(鄭1) 傍線部 得讓人扳起臉孔，厲聲喝斥。

報告者による訳では、日本語の文章を直訳したのに対し、鄭訳では、「厲聲喝斥」という慣用表現で、「きびしく声を掛け」ることと訳した。なお、原文にない、四字熟語の「扳起臉孔」も、(日1)に傍線された一文の全体の雰囲気を意訳したものとして見られる。

(日2) 傍線部 それで足りずに

という一文の訳は以下の通りである。

(繁 2) 傍線部 就算是這樣還不夠

(鄭 2) 傍線部 甚至還貪得無厭

こちらの例も、報告者の訳は直訳であるのに対し、鄭訳の場合は四字熟語の「貪得無厭」を使用している。この言葉の使用により、ニュアンスが原文とややずれてしまっている。

(日 3) 傍線部 一夜のうちに窮迫し

という一文の訳は以下の通りである。

(繁 3) 傍線部 一夜之間變得困頓

(鄭 3) 傍線部 一夕之間窮途潦倒

「窮迫」という言葉に対して、報告者はもっともニュアンスの近い「困頓」という単語を使った。一方、鄭訳の場合、「一夕之間」と「窮途潦倒」と、四字熟語二つも連用している。それによって、文章が文語的となり、中国語の文章としても美しくなっている。

(日 4) 傍線部 無精髪のばし放題の私の顔と、つくづく見比べ

という一文の訳は以下の通りである。

(繁 4) 傍線部 對照著我肆無忌憚亂長著鬍子的雙臉

(鄭 4) 傍線部 盯著我那張不修邊幅的臉孔仔細端詳著。

ここで引用した鄭訳を日本語に訳すと、「じっくりと私の身だしなみに無頓着な顔を細かく観察している」という意味になり、ニュアンスが原文とやや離れているようになった。これは、鄭訳での、「不修邊幅」という四字熟語及び文語的表現の「仔細端詳」の使用からもたらされた結果だと言えよう。

(日 5) 傍線部 ひとつひとつ、はつきり思ひ出され、ほとんど座に耐へかねた。

という一文の訳は以下の通りである。

(繁 5) 傍線部 點點滴滴想起二十年前と無地自容。

(鄭 5) 傍線部 瞬時皆歷歷在目，使我如坐針氈。

(日 6) 傍線部 うすのろらしい濁つた眼でぼんやり私を見上げてゐた。

という一文の訳は以下の通りである。

(繁 6) 用遲鈍呆滯的眼神抬頭看著我。

(鄭 6) 漫不經心的迷濛眼神，愣愣地仰頭凝望著我。

(日 7) 傍線部 ただ意味もなく

という一文の訳は以下の通りである。

(繁 7) 傍線部 我只是無謂地抬頭

(鄭 7) 傍線部 我茫然無的

引用 5・6・7 でも前述した例と同様な傾向が見られ、鄭訳では綺麗な文語的表現が多く見られ

る一方、報告者による訳は原文に近い直訳である。以上に挙げた例文から、発表者らの訳と鄭訳との相違点は大きく以下の二つにまとめられる。まずは鄭訳に見られる、四字熟語の頻出である。

鄭訳では、四字熟語が多用されているため、文章のトーンが文語に近い。一方、報告者らによる訳は口語的な表現で訳している。日本語の原作を参照すると、二つの訳の違いがより明白になる。この語彙選びに見られる相違は、翻訳にどのような影響を与えたか、鄭訳のもう一つの特徴、意訳の多用とあわせて考えたい。

鄭訳に意訳が随所にある点も特徴的であり、これは四字熟語や慣用句が多用されていることと関連している。文語的表現の多い鄭訳は、口語的な表現の多い発表者の訳より美しい文章にはなっている。しかし、翻訳作品として考量する際、異言語で書かれた作品を忠実に再現することこそが重要であるという方針をとるべきだと報告者は考える。そのため、意訳が免れない文語的な語彙の使用には再考する必要があるのではないかと思われる。

## まとめ

以上に述べたように、今回の翻訳作業では、文化面における共通点が多いため、難訳箇所はほぼないと言えようが、それにも関わらず、報告者らは異言語による問題と直面した。言語が切り替えられた時に生じたニュアンスの変化こそ、時には作品の世界を大きく変える可能性がある。鄭訳は中国語の文章として評価されるけれども、『黄金風景』に使われた言葉のニュアンスが若干ズレてがあることも否めない。

台湾における日本文学の紹介は、〈日本らしさ〉を求める一方、作品の中身については丁寧に読まれない傾向が強い。太宰治の『人間失格』もその好例の一つである。同じく中国語を共通語としている中国では、この作品の題名を『失去做人資格』と意訳した。一方、台湾では中国語として意味の通じない「人間失格」という言葉を、訳さずにそのまま残し、それで〈異国的〉な〈日本らしさ〉を醸しだし、読者の注目を引く効果を狙う。2001年にはじめて単行本された『人間失格』は、2001年から2010年の間に、異なる訳者による5つの版が出版されたが、誤訳の多い版を論外にして、多くの訳文では太宰治の独特な作風が失われ、文章の綺麗な意訳になっている。つまり、日本語のできない台湾の読者は、曖昧に〈日本らしさ〉の漂う『人間失格』という題名に惹かれたものの、彼らが読んでいる太宰の作品には〈太宰らしさ〉が失われているのである。今回の翻訳プログラムでは、以上に簡略に述べた台湾での太宰治の翻訳事情を考量した上、報告者らは翻訳の方針を直訳とし、『黄金風景』の翻訳作業を借りて、文学作品が異言語・異文化に読まれる時に最も伝わる形を見つけ出すことを試みた。